

2020年度 第三の居場所事業報告書

事業名：「にっこりひろば」を地域の居場所に
団体名：特定非営利活動法人にっこりひろば
代表者名：岡宮 真理

1. 事業内容（実績）：

にっこりひろばの運営

（1）日時：2020年4月1日～2020年3月31日

（2）場所：長野県長野市三本柳

（3）内容：

①居場所の提供（対象限定せず）

○毎週1回、月曜日～金曜日の何か

9時～10時（朝の居場所）利用者：2～4名

○毎週火曜日～金曜日

10時～12時（日中の居場所）利用者：2～10名

15時～17時（放課後の居場所）利用者：約10名

○毎週金曜日

17時～20時（夜の居場所）利用者：約15名

○あっとすくーるの実施（三本柳小学校との協働）



夏休みに3日間実施、学習支援と食事支援含む



②学習支援の提供（小学生、中学生）

○毎週1回、月曜日～金曜日の何か 9時～10時（朝の居場所）

利用者：1～2名

○毎週火曜日～金曜日 10時～12時（日中の居場所）

利用者：ほぼなし

○毎週火曜日～金曜日 15時～17時（放課後の居場所）

利用者：小学生 毎回10名ほど

○毎週金曜日 17時～20時（夜の居場所）

利用者：小学生 毎回10名ほど



その他、オンライン学習利用1名（夜の居場所）

- ③生活習慣の形成支援等（小学生）
 - 毎週火曜日～金曜日 15時～17時（放課後の居場所）
 - 利用者：小学生 毎回10名ほど
 - 毎週金曜日 17時～20時（夜の居場所）



利用者：小学生 毎回10名ほど

- ④生活困窮世帯とその子どもに対する相談支援等
 - にっこりひろばのオープン時間とLINE公式アカウントで相談を受付
 - こそだて支援として講座や茶話会を毎週月曜日実施
 - 参加者：毎回2～8名
 - フードパントリーの実施（物資の状況で月1～2回）
 - 毎回40家庭ほどの利用
- ⑤乙の外部関係機関・団体・個人との連携・調整日中の居場所（不定期）
 - 長野市こどもにやさしまちフォーラム（5名）学習支援・放課後の居場所（月2回）
 - NPO法人ITサポート銀のかささぎ（2名）学習支援（週1回）
 - 一般社団法人世界マザーサロン（1名）他、JAグリーン長野、長野県、長野市、地域住民、長野保健医療大学、三本柳小学校、川中島地区、更北地区、篠ノ井高校、信州こども食堂ネットワークなど
- ⑥前各号に掲げるもののほか、子どもの貧困対策全般に関すること
- ⑦自立するための自主事業（弁当、惣菜販売）
 - 子ども弁当の販売：5月の臨時休業中に実施（食事支援の意味を含む。200円）
 - 川中島地区ふれあい会への弁当販売
 - 6月より週1回惣菜販売ー12月は月6回ー1月より週2回

2. 事業内容詳細：
別紙参照

3. 契約時事業目標の達成状況：

【助成契約書記載の目標】

①居場所の提供（対象限定せず）

2022年目標＝週5回（放課後2時間）20名

②学習支援の提供（小学生、中学生）

2022年目標＝週2回（放課後2時間）20名

③生活習慣の形成支援等（小学生）

食事支援2020年目標＝放課後週2回、昼食月3回、夕食月3回 20名

④生活困窮世帯とその子どもに対する相談支援等

こそだて支援2020年目標＝月1回 6名

不登校支援2020年目標＝月4回

⑤乙の外部関係機関・団体・個人との連携・調整

日中の居場所（不定期）長野市こどもにやさしまちフォーラム（5名）

学習支援・放課後の居場所（月2回）NPO法人ITサポート銀のかささぎ（2名）

学習支援（週1回）一般社団法人世界マザーサロン（1名）他、JAグリーン長野、長野県、長野市、地域住民、長野保健医療大学、三本柳小学校、川中島地区、更北地区、篠ノ井高校、信州こども食堂ネットワークなど

⑥前各号に掲げるもののほか、子どもの貧困対策全般に関すること

⑦自立するための自主事業（弁当、惣菜販売）

【目標の達成状況】

①居場所の提供（対象限定せず）

週4回実施できている（今年度の目標は達成）

毎回10名～20名

小学校の行事に合わせて週5回実施した月もある

「長野市トワイライトステイ事業」に申請、今のところ利用にはつながっていない

②学習支援の提供

現在週4回学習支援を行えている（今年度の目標は達成）

毎回10名ほど（コロナ禍で人数制限をしている）

非公開で朝の時間に、学校に行かない子が学習する支援体制ができた（登校扱い）

③生活習慣の形成支援等（小学生）

放課後の居場所で週4回、夜の居場所として週1回（目標達成）

毎回10名～20名

④生活困窮世帯とその子どもに対する相談支援等

こそだて相談（目標達成）

→ 講座や茶話会など月2～4回実施、その他時間をとって相談の件数も少しずつ増えている
不登校支援（数値的な目標は達成できず）

→ 受け入れ体制はできているが、利用に結びついていない
三本柳小学校の教室にすることができない児童の受け入れを試験的に実施した
不登校児童が来れるように繋ぎたいという相談は数件ある

⑤乙の外部関係機関・団体・個人との連携・調整
団体との連携は、前年度同様行えている（目標達成）

⑥前各号に掲げるもののほか、子どもの貧困対策全般に関すること

⑦自立するための自主事業（弁当、惣菜販売）

4. 事業実施によって得られた成果：

今年度予定していた事業は、実施方法に変更があるものの、ほぼ通常通り行われている。
（日中の飲食と放課後の軽食の提供を休止中、放課後の人数制限）

【日中の居場所の実施】

平日毎日オープンできていることで、日中の利用者が大幅に増えた。

育児相談や家庭の相談などにつながっている。

独居老人の利用もあり、未就園児との交流も行われている。

小学校で教室にいられない児童たちを試験的に受け入れた。今後どのように継続していくかは
学校と話し合いを重ねたい。

【放課後の居場所の実施】

週4～5回開けていることで、いつでも開いているという安心感を持ってもらえるようになった。
にっこりひろばを利用しない日も、入り口に寄ってから公園や友達の家に行くなど、ちょ
っとした安心基地になっているようだ。

【夜の居場所の実施】

これまで日曜日に行ってきたこども食堂よりも、夜の居場所の方が日常につながっている
生活習慣の形成支援という中では、こちらの方がより効果がありそうだと感じている。
ケアが必要と思われる家庭が複数利用できている。

【自主事業：惣菜販売】

コロナの影響で販売スタイルを大幅に変更したが、一定の利用者がある。

独居老人、子育て世代が中心。スーパーやコンビニで購入するのとは違い、ここで他の利用者
やスタッフと話せることが大きな購入の動機づけになっていると思われる。

「居場所」の機能が最大限に活かしている。

5. 成功したこととその要因：

①現地支援チームの方々のご協力のおかげで、活動内容や繋がりが広がった。

(川中島地区からは民生委員さんからの勉強会の申し込みがあったり、更北地区の民生委員さんからはフードドライブで集まった物資をご寄付いただいた。また区長会での説明の場をいただけた。)

長野市との連携も模索しながらではあるが、前進させていただいている。

②利用者が定着している＝スタッフの充実（前年度と同じ）

スタッフと定期的なミーティングを行い、情報の共有を行なっている。また子どもの関わり方など外部講師を招いた勉強会も行なっている。子どもたちとの信頼関係を慎重に築けている。

③チームビルディングを良好に行えるように常に心がけている。

定期的なミーティング、面談など。

6. 失敗したこととその要因：

失敗はしていないと思う。出来る限りのことはやれていると思っている。

コロナ禍での運営が簡単ではない。

7. 活動を通じて明らかになった新たな課題と対応案：

【放課後の居場所】

人数制限を行いながら実施しているが、家が近い子ですぐにいっぱいになってしまうため、家が遠い子どもたちから不満が出ている。若干であれば受け入れるが、その子たちは常に5名ほどの団体行動。その中にはケアが必要と思われる児童が数名含まれている。どう受け入れていくか課題。

【スタッフについて】

感染防止対策のため、スタッフの人数も最小限で行っている。子どもの話をゆっくり聞ける大人をもう少し増やそうか検討中。

【ボランティアについて】

新規のボランティアを原則受入れ停止にしている。

一度大学生から問い合わせの電話があって断った経緯があるが、実は大学がオンライン授業のために学校にいけず、ひきこもりで精神的に病み始めていると後で親から連絡があった。もう少し丁寧にヒアリングすべきだったと反省している。

2020年度 第三の居場所事業報告書

事業名：子どもの第三の居場所

団体名：特定非営利活動法人まちの縁側なから

代表者名： 齋藤 百合子

1. 事業内容

- ①学習支援
- ②生活支援
- ③食事支援

2. 契約時事業目標の進捗状況：

【助成契約書記載の目標】

① 学習支援

- 1、 科目別6人以内＋学習室20人以内（7歳～18歳）
- 2、 土曜日を中心に高校生ボランティアによる学習支援
- 3、 学ぶ楽しみ、分かる喜びに添う支援

② 生活支援

- 1、 ソーシャルワーク（相談支援）
- 2、 調理、片付け、洗濯等家事の学び
- 3、 食事マナー等周りの人たちと心地よい関係を築くための付き添い

③ 食事支援

- 1、 隔週土曜日：調理も一緒に
- 2、 平日は食事提供

【目標の進捗状況】

① 学習支援の進捗状況

- 1、計画を実行することが出来ず
- 2、コロナ禍により上田高校ボランティア班からは休止になっているが、佐久長聖高校や教員志望

の大学生が平日も来てくれるようになった。また、同級生や上級生の支援も自発的に行われるようになった。

ようになった。

- 3、一切勉強する気の無かった子が1時間集中して勉強するようになった。また、こども食堂の時には

勉強しようとしなが、学校では積極的に学習に取り込めるようになったとの報告が本人・学校・

保護者からあり。

みんなで畑作は5月に1回実施のみ。



【高校生・大学生ボランティアによる学習支援】

【楽しみながら文章能力を養うゲーム】

② 生活支援の進捗状況

1, 相談支援

現在小学生3人・中学生3人・成人1人 それぞれ月1～2回の家族支援と本人のみと週1回(2人)

3ヵ月に1回相談支援勉強会開催。

保護者同士の情報交換の場も持つことに寄り、安心や学び合いの場も提供出来た。

最初に始めた子は学校でもすっかり落ち着いた。本人の希望により服薬も昨年4月より中止した。

初期の主訴が「僕は学校にいじめられに行っているようなもんだ。」であった子が、友達と仲良く遊べるようになり、「学校が楽しい。」と言うようになった。

怒りが頂点に達すると言葉が出なくなり意識もはっきりしなくなった子が、何が不快かを言葉で表現出来るようになり、怒りの発作も無くなった。

御代田町社会福祉協議会・学校・町教育委員会との連携が進み、子ども達に細やかな支援が出来るようになった。例えば、学校帰りに意地悪をしてしまった、或いは怪我をさせてしまった等は2家族で話し合いの場をもつ、学校に連絡し情報共有する等を行い解決した。

第4回相談支援勉強会には茂木教育長と岡本心理士に、町の取組となからとの連携をお話し頂いた。

2, 調理を積極的に手伝いたい日と遊びの方を優先したい日があるが、子ども達の気持ちを尊重。

積極的に手伝う子は上達も早い。洗濯機を使ってもらう機会は無いが、食事後の床拭き雑巾の手

洗いをしてもらっている。

3, 食事の盛り付けはバイキング形式にしているが、子ども達は自分の食べられる量を見極め、食

べ残しが無くなってきた。食事運びや片付けも協力し合う様子も見られる。

畳の上で正座して食べられない子もいるが優しい言葉かけでおおらかに見守っている。

③ 食事支援の進捗状況

- 1, 第1・3・5土曜日開催。日常の調理の他に地域の伝統食（そば打ちなど）・スペイン料理なども教わり、子ども達は興味津々で参加し、「美味しい。」と言いながら食べた。



【そば打ちを習っている様子】

第1土曜日にはりんごっこ保健室の保健師さんに「からだ探検隊」という名の性教育をして頂いている。毎回子ども達は目を輝かせて参加している。卑猥な言動を繰り返していた子が、生と性の正しい知識を学ぶ内に自己肯定感を高め、周りへの配慮が出来るようになり、周りに不快感を与えることが無くなった。

- 2, (月) (水) は公開したこども食堂。(火) (木) (金) は静かな環境を必要とする子どものためのこども食堂としている。

掃除・賄い担当者もその日の子ども達の様子から、一人ひとりの子どもに配慮して良い関係を保ってくれており、子ども達からの信頼感も大きい。

こども食堂で使い切れない野菜等は参加者にお持ち帰り頂いたり、ご近所も含めお世話になっている方にお配りしたりしている。

沢山頂いたお米は麴にしたり、寄付を頂いた方の返礼に使ったりしている。

【食糧支援で宮城県から届いたお米】





【学用品リユース・フードパントリーに寄せられた物資】

3. 事業実施によって得られた成果

①学習支援・・・宿題さえやらなかった小学生が1時間集中して勉強するようになった。また、子ども同士の支え合いが増えた。

コロナ緊急支援助成を紹介して頂き、完全に独立した静かな学習室（プレハブ）を作ることが出来た。

②生活支援・・・相談支援、からだ探検隊、掃除・賄い担当者等子ども達と直接関わる人達から、或いは子ども同士で互いに影響し合い、自ら学んでいる様子が見られる。コロナの影響もあり、家族数が限定されたためか、一つの家族の様な親密で落ち着いた雰囲気生まれた。

コロナ緊急支援助成で同時に（昨年12月より）学用品リユースとフードパントリーを本格化させることが出来、これまで繋がりのなかったより多くの人たちと繋がりを持つことが出来た。経済的に困難を抱える家庭とも繋がれたように思える。

「ちょっくら（障がいのある子どもと地域の人達を近しくすることと、就労支援を兼ねた取り組み）」を外部団体とし連携することで大きく進展し、子ども達が実際に学ぶ場を得られた。

④ 食事支援・・・より多くの人たちと繋がりが出来、沢山の食材を頂くことが出来た。そしてその一部を配布したりお礼に使ったりすることが出来た。

子ども達には好きなだけ食べてもらうことが出来た。

調理担当者は料理上手なだけでなく、子ども達に信頼され、時には悩み相談等子どもに寄り添いにも大きな力を発揮してくれた。

4. 成功したこととその要因

こども食堂を開く以前からの繋がりがあったこと。開いてからの新たな繋がりが自然体にとけあったこと。

スタッフや周りで応援して下さる方達に志が高い温かい方が多いこと。
地域の民生委員さんにも具体的にお願ひし協力が得られたこと。
もともと社協と連携が組めていたところに、学校、教育委員会と具体的に連携が組めたこと。
町の協力が得られたこと。

コロナ禍により参加人数が限定されたこと。

衛生面には気を付けながら、コロナ禍でも平常通り開催し続けられたこと。

より広くなからの存在とその役割を知って頂くことが出来（東信教育事務所に県議会議員の研修会に選んで頂いたこともあり）、新年度には佐久大学看護学部の（地域者交流実習）実習先として指定して頂いた。「地域の様々な人が混じって過ごすことで、一人ひとりが互いに学び合いより遅しく、生活しやすくなるのでは。」との考えを支持して頂いたとも思う。

5. 失敗したこととその要因

教室単位の学習室が開けなかった。新たに引き継げる人材を確保できなかったことによる。
日本語教室を1回も開くことが出来なかった。広報に日本語しか使わなかったことと十分に力を注げなかったことによる。

食べ物のお大切さと生産の喜びを味わうための「みんなで畑作」は1回しかひらくことが出来なかった。代表者の力不足により時間と労力を注ぐことが出来なかった。

併設する学習塾の子ども達に静寂を確保してやれない時間が多くなってしまったこと。こども食堂と同じ空間であり、こども食堂優先の雰囲気生まれたこと、こども食堂を応援して下さる方が来所した時に、その方達への気遣いの方が大きかったこと。

6. 活動を通じて明らかになった課題と対応案

この1年間で最も大きく作用したのが相談支援と考える。御代田町が不登校児や障がい児に力を注ぎ始めた時期とも重なり、これまでにない学校との連携が生まれ、苦しんでいる子どもとその家族が問題解決に進めるような環境が整って着たこと。

なからと繋がっていなかった不登校等の子ども達を紹介して頂くようになった。紹介者と共に、当事者の問題解決に向かう場に立ち会うことが増えて行くかもしれない。

相談支援勉強会を通じてともに歩める人材育成・開発に努めていく必要がある。

2020年度 第三の居場所事業報告書

事業名：みんなの居場所 ゆめひろの運営
団体名：NPO法人 末広プロジェクト
代表者名： 石城 正志

1. 事業内容

- ①学習支援
- ②食事支援
- ③生活支援

2. 事業内容詳細：

① 学習支援（まなび舎）

毎週1回水曜日にNPO教育支援協会長野による学習支援（1回1時間、月3回月謝3,000円）に会場を提供。ここに高校生を中心としたボランティア・スタッフを参加させ、学習支援のノウハウを学ばせる。このボランティア・スタッフを中心に水曜日以外の放課後にNPO教育支援協会長野に頼らない学習支援を週3回程度行う。また長期休業中には無料補習を行う。

② 食事支援（ゆめひろ食堂）

毎週水曜日「まなび舎」の開催にあわせてと、さらにもう一日食事支援を行う。「まなび舎」が16:00～17:00、17:30～18:30、19:00～20:00の3枠で開講することから、17:30～19:00の間に食事を提供することとする。料金は高校生以下無料、大人は300円とする。

③ 生活支援

「まなび舎」「ゆめひろ食堂」の開催にあわせてと、さらにもう一日、子どもとその保護者の相談を受ける。利用者の状況を見て「子育てサロン」等も開催する

④ 遊び支援

契約内容には含まれていないが、前年度末の3月に「ゆめひろプレイパーク」を、今年度途中の10月より「みんなのボードゲーム会」を開催した。その後、どちらも月1回の行事として定着しつつある。これは「遊び支援」として、「学習支援」と対をなす重要な活動と言える考えるので、報告事項に含めることとする。

3. 契約時事業目標の達成状況：

【助成契約書記載の目標】

- ① 学習支援（まなび舎）の目標 週4回実施
- ② 食事支援（ゆめひろ食堂）の目標 週2回実施
- ③ 相談支援 週2回実施
- ④ 遊び支援 月2回実施

【目標の達成状況】

- ① の達成状況…毎週水曜日夕方の「まなび舎」開催と、長期休業中の無料補習を実施
今年度は、新型コロナウイルスの影響により、3月28日～31日の無料春期補習のあと4月から5月の半ばまで、「まなび舎」の通常の学習支援を中断せざるを得なかった。その間、諏訪市のあゆみステーションより依頼を受けた、小学生1名中学生1名の個別支援だけを行った。5月13日に通常の学習支援を再開して以降は、毎週学習支援を行い、あゆみステーションから依頼を受けて個別支援を行っていた生徒2名も、ここに加わり、毎回10名弱の参加者で支援を行っている。
- 再開にあたって、諏訪地域10高校にチラシを配布し、あらためて高校生スタッフを募集したところ3名の高校生が名乗りをあげてくれ、昨年より継続の5名に加え、8名の高校生が学習をサポートしてくれることとなった。なお夏休みを中心とした期間のみ手伝ってくれた高校生、大学生もいた。また8月からは大人のサポーターもひとり加わった。
- 毎週の「まなび舎」に参加する小中学生の拡大を目的に、地元小中学校にチラシを配布して、夏期無料補習（8月5日～8日）、冬期無料補習（12月29日30日、1月2日3日）、春期補習（3月28日～31日）を実施し、それぞれ、のべ30名ほどの参加者があった。
- しかし、コロナ禍のなか、毎週水曜日以外の放課後に高校生が小中学生の宿題を見たり、遊び相手になるといった活動を立ち上げることは出来なかった。



（冬期補習の様子）

- ② の達成状況・・・新型コロナウイルスの影響で中断
昨年度の2月時点では全体で20名程度が利用するまでに拡大した毎週水曜日の「ゆめひろ食

堂」であったが、新型コロナウイルスの影響で3月に活動を中止して以来、再開のめどをつけられずにいる。

この間、何度か再開に向けての検討を行ったが、「ゆめひろ食堂」の活動が1年に満たなかったことから、利用者のなかに経済的、家庭的困難に直面している子どもや、子育て家庭が居なかったことから、コロナ感染のリスクを冒してまで再開することに対する合意形成が出来なかった。

その一方で、子どもたちに外遊びの機会を提供することを目的に3月にはじまり、コロナの影響で中断したものの、コロナ禍の中だからこそ実施すべきと6月に再開した「ゆめひろプレイパーク」の中で、火起こし体験、焚き火体験の延長として、鍋でジャガイモを煮たり、豚汁を作ったり、鉄板で焼き肉をしたりすることで、月に1回ではあるが、食事の提供をすることとなった。



(自分のおにぎりを自分で握っている様子)



(簡易かまどで煮炊きする様子)



(12月のプレイパーク&クリスマス会の様子)

③ の達成状況…定期開催に至らず

「まなび舎」に通う子どもとその保護者を主たる対象として相談を受け、そのメンバーを核として「子育てサロン」の定期開催を考えていたが、新型コロナウイルスの影響もあり、想定した形での相談はスタートしていない。

しかし、2020年3月に諏訪市のあゆみステーションから個別に紹介を受けた特別支援教室に在籍する中学生2名、小学生の2名とつながり、それぞれのニーズにあわせた支援を行った。今後、さらに困難な状況を抱えた子ども、保護者とつながり相談機能を充実させていきたい。

④ の達成状況…月1回の行事として定着

「ゆめひろプレイパーク」は、ゆめひろの小さな裏庭を活用した外遊びの機会の提供を目的に、令和2年3月に第1回目を開催した。当日はあいにくの雪であったが、参加した子どもはサポートの高校生と一緒に雪だるま作り、かまくら作りに興じた。遊びの機会を提供することの重要性を痛感し定例開催を目指したが、新型コロナウイルスの影響で4月、5月と休止せざるを得なかった。

6月に再開して以降は、コンクリートブロックで簡易なかまどを作ったことから、火起こし体験、調理体験などが外遊びの中心になった。そこため結果として「食事支援」ともいえるような状況が生まれた。

「みんなのボードゲーム会」は、多世代交流のツールとしてボードゲームを置くべきとの提案を8月に大学生よりいただいていたところに、9月よりスタッフとなった方のご主人がボードゲームに精通していたという偶然が重なりスタートした。

どちらも土曜日の10時から15時まで昼食時間を挟んでの開催であることから、将来的な構想としては、毎土曜日の午前中を学習支援、昼を食事支援、午後を遊び支援とし、朝から夕方まで子どもを預かることにより子育て世代支援ともなることを考えている。



(小さな裏庭でのプレイパーク)



(雨降りの日は室内で遊びます)



(みんなのボードゲーム会の様子)

4. 事業実施によって得られた成果：

- 管理人（店長）を雇用することにより、常時開館している居場所としてオープンした「みんなの居場所 ゆめひろ」であったが、店長の退職により、常時開館が継続できるか危ぶまれる事態となった（令和元年12月）。
- そのときシニア大学のボランティアグループの皆さんが協力を申し出てくれ、「ゆめひろ管理応援の会」を組織し、理事とボランティアの皆さんで当番シフトを組んで日常の管理を行うことになった（令和2年1月）。現在、6名のボランティアの皆さんと理事4名が当番業務をおこなっている。
- そんななか、ゆめひろに魅力を感じ、ぜひスタッフとして働きたいという方が現れた（令和2年9月）。店長をフルタイム雇用して失敗し、その後も店長に興味を示して下さる方が複数名いらっしゃったが最終的な合意に至らなかった経験から、週20時間までの勤務という形で、9月からお試し雇用、1月からは正規スタッフとして勤務していただくことになった。
- 当番の方にはほんの薄謝で、スタッフの方にも限られた時間のなかで最低限の賃金でお勤めいただいている。客観的に見れば極めて困難なことをお願いしているが、どなたも「ゆめひろ」を自分にとって大切な居場所と捉えてくださり、誠実に熱意をもって関わってくださっている。
- そのようにして常時開館（月から金までの午前10時～午後6時30分）、休日のイベントを重ねるうちに、「ゆめひろ」という居場所を自分の居場所だと感じファンになってくれる利用者も現れた。まだその数は多くないが、そういった理解者、協力者を増やしていければと思う。（写真は、（週2回集まり、手作りマスクを作り、小学校への寄贈を続けている「エスペランサ」の皆様の活動の様子と、ゆめひろ取材し、「子ども新聞コンクール」に応募した小学生の作品）





5. 成功したこととその要因：

コロナ禍のなか思うような活動が出来ず、参加者も運営協力者も思うように増やすことが出来なかったが、重ねて利用して下さる利用者は「ゆめひろ」ファンになってくれ、協力者との関係も深めることが出来た。

苦しい状況が続くなかで、コロナ後につながる人間関係を構築することができた。

要因：元々、「多世代交流の居場所」を目指し、「まなび舎」「ゆめひろ食堂」といった子ども支援ばかりでなく、「歌声喫茶」「諏訪まちづくり塾」など大人や高齢者を対象としたイベントも行っていたが、新型コロナウイルスの影響で大人や高齢者向けのイベントが行えなくなった。

再開後の最初のイベントとして遊び支援である「ゆめひろプレイパーク」を開催し、その後も「夏祭り」「一周年イベント」「クリスマス会」といったイベントを子どもに参加してもらうことを前提に組み立てた。また多世代交流を目指して10月にはじまった「みんなのボードゲーム会」も現状では子ども向けのイベントとなっている。

さらに、開館当初から火・金の午前中に活動しているシニア大学を母体としたボランティア団体「エスペランサ」も、コロナ禍のなか活動の中心を「手作りマスク作り」とし、そのなかで子ども向けマスクを圏域の小学校に届ける活動をして。

「諏訪まちづくり塾」「本棚商店街」などといった大人をターゲットとした取り組みも行ったが、現状の「ゆめひろの」の活動の中心が、「子ども、子育て世代」をメインターゲットとし、その活動を支援したい「高齢者・大人・高校生」による活動となっていることは間違いない。

振り返ってみれば「多世代交流の居場所」を謳いつつ、高齢者ばかりで子どものいない町に呼び込むべき最初のターゲットとして想定していたのは「子ども・子育て世代」であった。新型コロナウイルスによってもたらされた状況の中で、理事・運営委員・スタッフ・ボランティアの意識が、その原点を思い出すように方向づけられ、自然な形で意識統一が図られてきたことは幸いであった。

6. 失敗したこととその要因：

前年度末の令和2年3月には、地元高校によるマルシェ、ボランティア市民活動紹介講座などが、ゆめひろを会場として行なわれることが決まっており、また放課後の高校生の利用も増加しつつあった。しかし新型コロナウイルスの影響でそれら全てが白紙となり、さらに4月から5月の中旬までは閉館を余儀なくされた。

本来ならば、今年度当初より、地元の小中学校や諏訪圏域の関連団体に広く声がけし、利用促進を図るべきであったが、コロナにより出鼻をくじかれた形になり、コロナが一段落した6月以降も思うように利用者を増やすことができないまま、再びコロナが厳しい状況となってしまった。

要因：「みんなの居場所 ゆめひろ」開館以前に、子ども食堂、学習支援、相談支援といった活動経験のないまま、開館と同時に全てのことをゼロから立ち上げることとなった。また、「多世代の居場所」を目指していたため、子ども・子育て世代支援ばかりでなく、高齢者支援、街づくりなど多様な取り組みを同時並行で行うことになった。

経験値が乏しいなか多方面の取組を限られた人数で行ったことにより、広報は「ゆめひろ通信」や各行事のちらしを配布しマスコミを通じて流すことが中心となり、地元の方たちとじっくりと懇談する機会が十分に持てなかった

7. 活動を通じて明らかになった新たな課題と対応案：

① 利用者の拡大

- ・駐車場がないことから、歩いて来られる地域の住民、学校等への働きかけを強める（回覧板を利用した「お便り」の回覧、地域情報誌の活用などだけでなく、ちらし等を持って地域を回り、じっくりと話をし理解を得ていく活動をしていく）。
- ・地元商店との連携を強める（地元商店街の行事参加、手芸、革細工、絵画など地元商店と連携したイベント開催、地元商店も参加するマルシェ開催、地元飲食店と連携した食品の提供など）
- ・子育て世代を対象としたイベント等を実施する（NPO子ども文化ステーション、NPOちやいんどふっどなどと連携して）
- ・学習支援、子ども食堂の利用拡大のため、小中学生とその保護者への働きかけを強める（季節ごとの無料補習、学校での案内の掲示、地域情報誌の活用など）
- ・当初想定していた高校生の活動の場としての利用が少ないことから、あらためて高校生への働きかけを強める（学校への案内の掲示など）

② 運営体制の見直し（中核となるスタッフやボランティアの方との関係は構築できたので、そこを起点に活動の理解者、協力者を増やしていく）

③ 子ども支援（学習支援、子ども食堂）における諏訪市との連携

- ・諏訪市のあゆみステーションと連携し、市の事業の一部を受託するなどして、本当に支援を必要とする子どもや家庭とのかかわりを構築する

④ 多世代交流の場としての発展

- ・シニア世代の居場所としての可能性は見えてきたので、シニア世代がボランティアとして子ども、子育て世代に関わっていく機会を、イベント等を通じて増やしていく
- ・学習支援などを通じて、高校生、大学生が小学生に関わっていく機会を、イベント等を通じて増やしていく

8. その他 コロナ対策

新型コロナの影響で、3月から6月にかけて閉館を余儀なくされた。再開にあたって、新型コロナ対策がもとめられるなかで、入館時のマスクの着用、検温の実施、手指の消毒、入館者の連絡先の記録、館内の消毒の徹底といった一般的な対応の他に、以下のような対応を実施した。

- ① それまで1階フロアについては土足で入館できたものを、靴を脱いでの入館に改めた。
- ② 各テーブルにアクリル板を設置した。
- ③ 複数のグループが利用する場合のためスクリーン（仕切り板）を設置した。
- ④ 無料飲食コーナーに食器棚を設置（それまでは、ふきん等をかけむき出しで置かれていた）。
- ⑤ 食料保管庫も兼ねるバックヤードに床を張って、より衛生的に食品の管理ができるようにした（それまでは、土足で入れるコンクリートのたたきに置かれていた）。
- ⑥ 入り口から前庭部分の居場所の整備（館内を土足厳禁にしたことにより入館のハードルが上がっていたものを少しでも緩和するため）

① 靴を脱いでの入館への切り替え



② アクリル板の設置



③ 仕切り板の設置



④ 食器棚の設置



⑤ バックヤードの改修



⑥ 入り口～前庭部分の整備



2020年度 第三の居場所事業報告書

事業名：多世代交流カフェ&学習サポー

ト

団体名：特定非営利活動法人 Hug

代表者名： 篠田 阿依

1. 事業内容

- ①学習支援（個別の支援、こどもカフェでの宿題支援）
- ②生活支援（若者の就労支援、ママカフェ）
- ③食事支援（多世代交流カフェ・こどもカフェ（こども食堂）・地域と連携した食材配布活動）

2. 契約時事業目標の達成状況：

【助成契約書記載の目標】

- ④ 学習支援
 - 4、 個別の支援・・・週5日実施。1日5～10名利用。こどもカフェ（こども食堂）は1回約5人利用。
- ⑤ 生活支援
 - 3、 相談支援・・・随時実施。
 - 4、 若者の就労支援・・・カフェでの接客、調理補助、清掃などをサポートおこなった。
 - 5、 ママカフェ・・・不登校の保護者の方と協働で実施。
- ⑥ 食事支援
 - 4、 日中の「多世代交流カフェ」・・・幅広い世代に居場所の提供、相談事業を実施。
 - 5、 夜の「こどもカフェ（こども食堂）」・・・週1日実施。（新型コロナウイルス感染予防のため、9月までは休止。10月からお弁当配布の形で再開。）居場所の提供及び宿題支援を実施。
 - 6、 地域と連携した食材配布活動・・・地域の有志の会と連携して、食材募集及び子育て家庭への食材配布を実施。

【目標の達成状況】 t

- ⑤ の達成状況・・・小学生対象の「宿題サポート」は11名（2年生3名、4年生2名、5年生6名）の登録があった。不登校や中学生対象の「個別学習サポート」は21名（小学6年生1名、中学1年生4名、中学2年生7名、中学3年生7名、通信高校生2名）の登録があった。学習サポートボランティアの方と共に保護者面談をおこない、本人の願いや得意不得意、保護者の願いを確認し、取り組む目標を1人ずつ決定した。宿題サポートは週3日、個別サポートは週5日実施した。
「こどもカフェでの宿題支援」は、毎週水曜日の夜にこどもカフェを利用する小・中学生（毎回約5名）を対象に、松川高校ボランティア部の生徒や地域のボランティアの方と共に、宿題などのサポートをおこなった。

図1. 小学生対象の宿題サポート



図2. 学習サポートのお楽しみ会(夏・冬)



⑥ の達成状況・・・カフェやこどもカフェで随時実施した。保護者からの子育てに関する相談や、時には学校の先生が顔を出してくださり、子ども達の様子について情報共有をした。また、今年度より、近隣の小学校の支援会議にも定期的に呼んで頂き、学校や行政と連携したサポート体制が構築されつつある。

「若者の就労支援」では、2名の女子と1名の男子（いずれも19歳～20歳）が、カフェの接客や清掃に取り組んでいる。それぞれの得意分野を生かし、働く練習やコミュニケーションの練習ができるよう、声掛けをした。また、「子ども家庭支援センター」や行政の保健士さんとも話をする機会を持ち、情報共有をおこなった。

「ママカフェ」は、不登校の小・中学生を持つ保護者からの要望を受けて11月に開催した。保護者8名が参加し、お茶をしながら悩みを相談したり、お互いに質問しあったり、よい雰囲気話すことができた。今後も、「就労」や「学習面」などにテーマを絞りながら、定期的開催してほしいという声があがっている。

図3. 若者の就労支援(ワークショップ)



⑦の達成状況・・・「多世代交流カフェ」では、新型コロナウイルスの影響で5月までは休止したが、6月から再開。休止中は、ガーゼマスクを手作りして販売するなど、できることで活動を継続した。再開後は、密を避けるため、「完全予約制」で昼食を提供している。1日平均5名程度の利用があった。特に地域の高齢者や、乳幼児連れの子育て世代の利用が多く、居場所となっている。感染予防対策を徹底しながら、継続していく。

「こどもカフェ（こども食堂）」では、新型コロナウイルスの影響で9月まで休止。松川高校ボランティア部の生徒やボランティアの方々と、再開できる方法を考え、「利用対象を小中学生のみに絞ったお弁当配布」の形で、10月から再開した。学習支援をした後、お弁当を配布する形で短時間の開催をした。参加者は少ないが、継続して利用する子どもたちが多かった。

「地域と連携した食材配布活動」は、新型コロナウイルスの流行により、新たに地域の中で立ち上

がった「地域で食材を循環させる会」と連携させて頂き活動した。松川町社会福祉協議会が事

務局となり、地域の有志の方々や松川高校ボランティア部の生徒たちと、食材募集（フードドライブ）

を7月から続けた。食材配布（フードパントリー）を毎月1回おこない、必要としている家庭へ食

材を配布するお手伝いをおこなった。

図4.こどもカフェ(こども食堂)のお弁当配布



図5.地域と連携した食材配布活動



3. 事業実施によって得られた成果：

①の「学習支援」では、三者面談を通して、クラス替えや休校などで不安定になった子ども達への具

体的なアプローチができた。また、「宿題サポート」「個別サポート」共に、登録者が増えた。

②の「生活支援」では、学校や行政、各機関との連携がさらに深まった。

③の「食事支援」では、特に新型コロナウイルスの影響が大きく、活動を休止することにも再

開することにも葛藤があったが、できることを続けていくことで、地域との新たなつながりも増え、食事や居場所を必要としている家庭と出会うこともできた。

4. 成功したこととその要因

①学習支援：コロナ禍により、休止するか迷うこともあったが、子どもたちの居場所や学びの場を守るため、休校中も継続して実施した。「休校中も行く場所があって、学習ができることで子どもたちに自信がついた」という保護者の声があり、継続して実施することの成果があった。

要因：学習サポートボランティアの方々（登録は現在11名）と月に1度ミーティングをおこない、子どもたちの様子や新型コロナウイルスの状況や対策などについて情報共有をおこなった。ボランティアの方々が、いつも同じ想いで子ども達と向き合ってくださいすることで、休校中も継続することができた。

②生活支援：学校や行政、家庭との「横の繋がり」が少しずつ深まり、子どもたちの様子について、その都度情報交換ができる体制ができつつある。

要因：新型コロナウイルスの影響もあり、不登校生徒の相談や個別サポートの希望が増えたため、学校との連携が必須になった。「学校以外の第三の居場所」として学校も認めてくださっていて、こちらで学校のテストを受ける生徒もいた。また、若者の就労支援については、18歳を過ぎると、こども家庭支援センターの対象から外れてしまうことから、こども家庭支援センターから行政の福祉課へ繋いでくれ、長い目で相談体制の構築ができた。

③食事支援：新型コロナウイルスの感染予防対策を徹底しながらも、できることを細々とでも継続した。

要因：「多世代交流カフェ」では、コロナ禍で完全予約制となっても、乳幼児連れの子育て世代の利用が多かった。子育て支援センターや図書館などが軒並み休止になり、子連れでの行き場所がなくなってしまう子育て世代にとっての、居場所としての必要性を改めて感じた。また、こどもカフェ（こども食堂）では、対象を絞り、お弁当配布の形にした事で利用者は減ったが、続けていくことが大切だと感じ、継続している。地域と連携した食材配布についても、地元企業や団体、個人など多くの方から食材提供のご協力を頂き、喜んで受け取っていかれる子育て世代の方の声も直接聞け、新たな活動に関われた事は、Hugにとって大きな収穫となった。今後に繋げていきたい。

5. 失敗したこととその要因：

①学習支援：不登校の子ども達のための、「日中の居場所」としての学びの場が必要。

要因：現在の「個別サポート」は、完全個別制のため、受け入れ人数に限りが出てしまう。そのため、日中に学校以外の居場所を必要としている家庭からの相談が増えているものの、現在は受け入れることが難しい状況にある。フリースクール的な事業を小規模でもできるよう、検討したい。

②生活支援：コロナ禍により、外出することや人と話すことに抵抗が大きくなっている。ママカフェも、11月の開催以来、感染拡大予防のため開催できていない。

要因：外出自粛により孤立が進んでしまうことが心配。ママカフェを、リモートの利用や、少人数の規模で飲食のない方法に変更するなど、地域の繋がりを保つ方法を考えていきたい。

③食事支援：新型コロナウイルスと向き合いながらも、休止せずできる事続ける。

要因：緊急事態宣言により、年度当初は食事支援に関する事業をすべて休止してしまったが、今後は感染予防の徹底と共に、必要とされることを積極的に動いていきたい。

6. 活動を通じて明らかになった新たな課題と対応案：

今年度は、コロナ禍により思うように事業ができない事で多くの悩みや葛藤があったが、それ以上に大きな発見や学び、出会いも多かった。子どもたちはいつも変わらず笑顔でエネルギーに満ちていて、改めて子ども達に救われ、子どもたちから学ぶことも多かった。

また、学校行事の休止や休校、外出自粛などが家庭や子ども達に及ぼした影響は非常に大きいので、学習面や精神面、食事面でのサポートを含め、できる部分で事業を継続し、細く長く続けていきたい。

厳しい状況がまだ続きそうだが、行政や企業、地域の方々と横に繋がりをつづけることで、家庭の孤立を少しでも防げるよう、Hugとしての役割分担を更に明確にしていきたい。

不登校の子ども達の日中の居場所としての要望も多いので、来年度はフリースクール事業としての運営も進めていきたい。同時に、「多様な学びの場」として来年度は町内の学校3校で正式に出席扱いとなる方向で、教育委員会とも話が進んでいる。

来年の自立運営に向けて、経営面でも研修や見直しを常におこない、よりより運営体制を確立させていきたい。

以上